

「ダビデの霊性」に見倣って生きる

●毎年の元旦礼拝では、この教会が最も大切なこととして位置づけている事を瞑想する日としています。それは、「**主の家に住む**」ということです。これは神と私たちとのかかわりを表わす秘密、「シークレット・スイング」(secret thing)で、ダビデの霊性、イエス・キリストの霊性でもあります。ここでいう霊性とは、神と自分とのかかわりを通して生み出されてくるすべてのことの土台を意味しています。

●クリスチャンとしての目に見える生き方、考え方、ライフスタイル、そうした土台となるものを霊性と言います。ダビデの霊性と主イエス・キリストの霊性は、実は、共通しています。その霊性を表わすキーワードが、「**主の家に住む**」ということです。イエスの場合は、「わたしの父の家に住む(いる)」という言い方をしますが、同じことです。今朝は、特に、詩篇 27 篇 4 節を中心に、そのことを味わってみたいと思います。

私はひとつのことを主に願った。私はそれを求めている。

私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。

主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。

1. ただ一つのこと(One Thing)

●この箇所を読むとき私の心はいつも感動で震えます。なぜなら、ダビデの生涯を貫き通している情熱、ダビデが生涯をかけて求めたもの、彼の心をとりにした情熱、ダビデの唯一の願いと目標がここに記されているからです。ダビデはイスラエルにおいて最も偉大な王であり、有能な指導者でした。戦いの勇士であると同時に、詩人、音楽家でもありました。しかしそれ以上に、彼を特徴づけているのは、真の礼拝者としてのダビデの姿です。

「ひとつのこと」(One thing)とは、第一のこと、最も優先すべきこと事柄、それを得るならば他のすべてのことが正しい位置を占め機能していく、そのような位置を占める「要となる事柄」です。ダビデはそのような事柄があることを知っていました。だから求めたのです。「私はそれを求めている。」(I will seek that)とあります。ここに私はダビデの強い意志を感じます。求めなければ得られない、自動的には決して得られない事柄なのです。

●自分の生涯において、最も優先すべきことがはっきりとしている人は、周囲の流れに流されないで、歩むことができます。そこに最高の価値観を見出しているからです。人はみな自分の価値観でものごとを考え、そして行動しています。ダビデは主にあって最も大切な事柄を自分の人生の土台として生きることができるよう、まず、主に願いました。そしてそれを求めました。前者の「願った」と訳されることばのヘブル語は「シャーアル」(לָקַח)が使われ、後者の「求めた」は「パーカシュ」(בָּקַשׁ)が使われています。どちらも「尋ね求める」という意味です。

●ダビデの前のイエラエルの王の名前は「サウル」でした。イスラエルの最初の王となった人です。

「サウル」はヘブル語で「シャーウル」(לְאוּר)と表記します。その名前の意味は、「神を尋ね求める、神に伺う」という意味があります。ヘブル文字のלָקַחの最初の文字である「シーン」(שׁ)は、本来、「歯」(英語の tooth)を意味します。そこから「食い尽くす、むさぼり食う」という意味が派生します。次の「アーレフ」(א)は、力あるものを意味し、「ラーメド」(ל)は、杖をもって教えたり、指導したり、導く者を意味します。「アーレフ」と「ラーメド」で、ヘブル語の「エール」(אֵל)となり、「神」を表わします。つまり、לָקַחは、**神を尋ねる、神に伺う、神の知恵を得る、神に熱中する**、という意味に発展します。ところが、自分の名前に秘められているメッセージを、彼は自らその生涯において空虚なものにしてしまいました。「サウル」は自分の名前のごとく生き

ようとはしませんでした。それは、神の代理者として立てられたサウルが、「霊媒によって伺いを立て」(10:14)とあります。「伺いを立てる」という表現には、「シャーアル」(לְאַחַד)と「ダーラシュ」(שָׁרַח)という動詞が重ねられています。どちらも「尋ね求める」ことを意味する動詞です。サウルの場合、尋ね求めるべき対象が神ではなく、死人の霊であったことが、神の怒りを買ったのです。そのために、皮肉にも「死人の行く国」である「よみ」が「シェオール」(לְיַמֵּי)であるのは、警告的な意味合いが含まれているのでしょうか。ヘブル語の語義の持つ深遠さを感じさせられます。

●しかし反対にダビデは、そのとき、そのとき、いつも主に何って(לְאַחַד)いるのです(Ⅱサムエル 2:1、5:23)。サウルとは全く逆です。サウルとダビデの霊性の違いはそこにあります。もう一度、ダビデの霊性を確認してみましょう。

私はひとつのことを主に願った。私はそれを求めている。

そして、前者の「願った」は「シャーアル」(לְאַחַד)が使われ、後者の「求めている」は「バーカシュ」(בָּקַשׁ)が使われています。サウルが霊媒師に伺いを立てるという場合は、「シャーアル」(לְאַחַד)と「ダーラシュ」(שָׁרַח)でしたが、「ダーラシュ」(שָׁרַח)も「バーカシュ」(בָּקַשׁ)も、熱心に「尋ね求める」という意味では同義です。

1. 主の家に住むこと

●ダビデが求め、そして願ったこと、それは具体的には「主の家に住むこと」でした。有名な詩 23 篇の結論も「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう」とあります。「まことに、私の生涯、いつくしみと恵みとが私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。」とダビデは誓っています。このダビデの誓いこそ、彼をして、その生涯を動かした情熱です。ここで主にある者たちは、ひとりひとり、自分を動かしている内なる情熱は何であろうかと自問してみる必要があります。

●「主の家に住む」とは主を礼拝し、主を知ることを意味します。「主の家」とは「主の宮」「神殿」とも言います。新約時代においては、主を信じる私自身の体が主の家です。

先日の礼拝で、イエスの「宮きよめ」の話を知りました。イエスがひどく怒って、神殿の境内で商売しているその屋台を次から次へと壊しました。細縄でむちを作って、羊や牛をみな追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒しました。「わたしの父の家を商売の家としてはならない。」と怒ったのです。ここでは「主の家」ではなく、「わたしの父の家」と表現されています。イエスがなぜこのようにひどく怒ったのかと言えば、「わたしの父の家」とする主の神殿、あるいは「主の家」の重要性がないがしろにされていたからです。ヨハネは「いのち」を最も重要に考えている使徒でした。ですから、神の宮である神殿が汚されていることは、神と人とのかかわりのいのちが疎外されていることを意味していたのです。

●イエスの関心は、いつも、父の家にいることでした。イエスが 12 歳になられた時に、両親とともにエルサレムで行われる祭りに詣でました。その帰り、両親とイエスがはぐれてしまい、両親はイエスを捜します。三日間も捜してようやく見つけたのですが、イエスはまだエルサレムの神殿で律法の教師たちと問答しておられたのです。両親はイエスを見て驚き、母マリヤはイエスにこう言いました。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」すると、イエスは両親に言われました。「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」しかし、両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかったと聖書は記しています。なぜ、わからなかったかと言えば、それは秘儀だからです。目に見えない事柄だからです。「父の家にいる」「主の家に住む」とは、外側からは見えないものなのです。隠れ場、すなわち「シークレット・プレイス」だからで

す。

●私たちはやがてイエスが「自分の父の家」と言われたところに行くために、迎えに来てくださるのを知っていますか。ヨハネ 14 章 1～3 節

1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。

2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。

3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。

わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。・・」

●信仰をもって主とともに、父の家(主の家)に住むことは、神との親しい交わりを意味するのです。その愛の交わりが私たちにいのちを与えます。ダビデはそれを求めたのです。しかも、「私のいのちの日の限り」(詩篇 23:6、27:4)、「いつまでも」です。

2. 主の麗しさを仰ぎ見る

●主の家に住む目的は、第一に、「主の麗しさを仰ぎ見る」ためです。主のすばらしさを知るためです。「麗しさ」とは、ビューティな事柄です。美の極み、いのち極みに触れることです。心奪われるような事柄です。そのような主の麗しさに触れるために、主の家に住むことが必要なのです。そこは主と自分との世界です。この世とは隔絶したところ。主の秘密に触れることです。

●イエスは弟子たちに、「わたしはあなたがたをしもべとは言わず、友と呼びます。」と言われました。

ヨハネの福音書のキーワードは「主との友情」です。主との友情への招き、しかもその友情を豊かに育むことが許されているというメッセージ、これこそがヨハネの福音書が伝えている重要なメッセージです。その主要テキストとなるべき箇所は 15 章 15 節です。ヨハネの福音書にしかないことばがここにあります。「わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。」

●「しもべ」と「友」との違いは明らかです。「しもべ」は主人のすることを知らないが、「友」は知らされるという違いです。また、「しもべ」は主人のためにいつも何かをしなければならぬという **Doing** が強調されるのに対して、「友」は相手のシークレットを知っているというかわり、つまり **Being** が強調されます。

イエス・キリストはここで、自分の父から聞いたことをすべて知らせたという点に注目してみましょう。なぜ、父から聞いたこと—神の秘密も含めて—を知らせたかと言えば、あなたがたは私の友だからという点です。この「友」としてのかわりこそが、ヨハネの福音書においてはとても顕著なのです。友として神の秘密を知る者とされる。そのために、友の特権として神のふところ—secret place—に入ることが許されているのです。

そのような「主との友情」は、私たちの信仰をゆるぎないものとし、希望はより広げられ、神への愛はさらに深まり、喜びと平安と確信は、私たちを豊かにしていくと信じます。その結果、私たちの祈りの生活は本質的に変わります。自由を感じるようになります。さらには断固とした姿勢でイエスについて行く者となるはず。日々を「イエスとともに過ごす」ことで、私たちのアイデンティティは、私たちの中にあるのではなく、キリストのうちにあることを見出します。それが私たちをしてブレない信仰を形作っていきます。

3. 思いにふける

●そのためには、**心を神に向ける集中力**が要ります。「主の家に住むこと」のもう一つの目的は「主の宮で、思いにふける」ためです。「思いにふける」(新改訳)とは、口語訳で「尋ねきわめる」、新共同訳では「朝を迎える」、LB訳では「黙想にふける」と訳されています。NAB訳では、to contemplate と訳されています。それは、主の御顔をじっと見つめ、主のことを熟考しながら、黙想する、沈思する、瞑想するという意味合いを連想させます。これはこの世からの逃避ではなく、むしろ、この世において勝利するためのものです。主の宮で悟りと確信を与えられ、新たな上からの力に満たされるための黙想、瞑想です。これはマリヤのライフスタイルです。

●主の語られるみことばに対する沈潜も含みます。最近、私は神が用いられたヘブル語の持つ意味にいよいよ関心を持つべく導かれています。日本語に訳されたことばを理解するだけでは、どうしても正しい概念は理解ではないということが分かってきたからです。そもそも書かれた原語が意味する概念を正しく掴むことなしには、逸脱を免れないことが見えてきました。しかし、そうした世界に入って行こう思うと、集中力が求められます。確かに、主の助けがあると信じますが、心の構えとしての集中力がどうしてもいるのです。

●ところが、私たちの周囲にはそれを妨げるものが数多く存在します。たとえば、騒音、人の声、テレビの音、電話の呼び出し、人の訪問等の物理的な妨げ。あるいは、人に対する恐れ、思い煩い、二心、ストレスといった心理的な妨げがあります。また、空想、おしゃべり、交わり、買い物・・・といった悪いとはいえないものでも、神との交わりの生活を集中させなくしてしまう要因となることがあります。このように、私たちの敵は様々な方法で、私たちが主と親しく交わるときを巧妙に妨げようとしているのです。

●それゆえ、ダビデは「一つのことを主に願った」のである。これは主との交わりを自分のライフスタイルの中で優先的に選び取るという決心を意味しています。「私はそれを求める」という強い決心なしに、集中して主と交わる生活ができないことを彼はよく知っていたのだと思います。しかるにダビデは、詩篇 86 篇 11 節で、「主よ、**私の心を一つにしてください**」と意識的に祈っています。なぜならそれは自動的に決して得られないからです。「主の家に住む」という決心は、「祝福を受け継ぐために召された」者(1ペテロ 3 章)に求められる重要な召しそのものです。

●イエスも「神の国とその義とを第一に求めなさい」(マタイ 6 章 33 節)といわれましたが、ダビデの「ただひとつのこと」と同じものです。こうした生き方を築くことは現代において決して容易ではありません。むしろ逆行するライフスタイルと言えます。

●ミヒヤエル・エンデの『モモ』という作品があります。功利社会の中で人々の大切な意味ある時間を奪い取っていく時間泥棒から、時間を取り戻そうとする女の子の物語です。この作品は現代に生きる私たちにとっても大切なメッセージを伝えています。現代の私たちは生存と防衛の保障を得るために、実に多くの時間を奪われているのです。このことに危惧の念を抱くことなしに、イエスの言われた「神の国とその義とを第一に求めなさい」という勧告の重さを理解することができません。ダビデのように、第一のことを第一にすることを選び取るならば、この時間泥棒との戦いを避けて通ることはできないのです。詩 27 篇 4 節のことばは、ダビデ自身の戦いであり、その戦いに勝利することが、礼拝者として生きようとするダビデの情熱でした。そしてこれは、ダビデだけでなく、すべてのクリスチャンの戦いであると信じます。同時に、私たちの意識改革という戦いが余儀なくされます。大きなチャレンジです。ですから、こう祈ります。「主よ。ダビデのように、この戦いに勝利できる者になりたいのです。この私を助けてください。」